学位論文審査報告書

Ⅰ　前言

真名子晃征氏が提出した学位請求論文「曇鸞浄土教における実践体系」について、審査の結果を報告する。論文は、Ａ４版で、１頁が３０字×１９行×２段組み（１１４０字)、本文は１２６頁（４００字詰に換算して３６０枚)、資料（「一覧表」）２８頁（４００字詰に換算して８０枚）からなる。

真名子氏は、２０１３年３月龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程真宗学専攻を単位修得満期退学、研究活動を継続し現在に至っている。

本論文のテーマは、真宗学の学問分野では浄土教理史に属する。北魏の仏教者である曇鸞（476~542）は、浄土教の教義と実践を確立した人物として、中国浄土教の祖として位置づけられている。天親の『無量寿経優婆提舎願生偈』（以下、『浄土論』）の註釈書である『無量寿経優婆提舎願生偈註』（以下、『往生論註』）の主著を中心に、阿弥陀仏の本願力に注目した他力的な教義を展開した点にその特徴があり、後の中国・日本の浄土教に大きな影響を与えたことは周知の事柄である。この曇鸞に関する研究蓄積は相当量に及び、近年においても継続的に成果が発表されるなど曇鸞研究は活況を呈している。しかし曇鸞の思想形成の背景となる諸思想との関連性については、必ずしも十分に解明され尽くしたとは言えないのが現状である。曇鸞が生きた南北朝時代は、いわゆる教相判釈も未だ確固たるものとしては存在しておらず、様々な思想が未整理に混在した時代であった。『往生論註』も多種多様な思想が取り込まれることによって形成されており、曇鸞浄土教の全体像の把握には、それらを可能な限り拾い上げる作業が不可欠となるが、そのことは特に『往生論註』に説かれる修行者の実践に関して該当する。主著『往生論註』に関する従来の研究では、特に教義面での影響関係が明白な『十住毘婆沙論』『大智度論』といった般若系論書等を中心に進められてきた。しかし、実践面に関する研究においてはそれらの思想との交渉を考察するだけでは不十分である。本論文は、こうした曇鸞浄土教をめぐる先行研究の現状と課題を踏まえつつ、特に「曇鸞の意図した実践とは何か」という問題に焦点を絞って、その実践体系を解明することを目的とするものである。とりわけ同時代の諸思想の動向の分析をとおして、氏独自の視点から曇鸞浄土教における実践体系の成立に深く関与していると考えられる「禅観思想」を抽出し、その実践体系成立に果たしている役割を丁寧に分析し、一つの試論としてこの分野の研究状況に一石を投じようとする論文であるところに、その意義を見ることができる。具体的な内容については、Ⅲの論文の要旨にゆずる。

Ⅱ　目次

最初に目次を掲げる。

【目次】

序論

第一章　実践体系成立の背景
　第一節　曇鸞の行実と著述
　　第一項　曇鸞の行実
　　第二項　曇鸞の著述
　　第三項　伝記等に関する二・三の疑問
　第二節　思想背景に関する先行研究概観
　　第一項　『浄土論』と『往生論註』
　　第二項　中観思想の影響範囲
　　第三項　道教との関係
　第三節　北魏・北斉時代の禅観思想
　　第一項　曇鸞と禅観思想
　　第二項　禅観経典の訳出
　　第三項　禅観経典とその実践
　　第四項　『観無量寿経』とその実践
　　第五項　僧稠と『観無量寿経』
　小結

第二章　『往生論註』における修行者
　第一節　『往生論註』における凡夫と菩薩
　　第一項　問題の所在
　　第二項　三輩と九品
　　第三項　諸師の九品理解との相違
　第二節　願生者の分類
　　第一項　「上品生」と「下品生」
　　第二項　菩薩の定義
　　第三項　凡夫としての菩薩
　第三節　願生者と得生者
　　第一項　「未証浄心の菩薩」と「平等法身の菩薩」
　　第二項　修行者の階位とその超越
　　第三項　転換点としての往生
　小結

第三章　『往生論註』における五念門と十念
　第一節　『往生論註』における行
　　第一項　研究の視点
　　第二項　五念門と十念
　　第三項　諸師の五念門理解

第四項　十念と称名
第二節　「念の相続」に関する表現
第一項　五念門釈に見られる「念の相続」
第二項　十念の説示に見られる「念の相続」
第三節　五念門と十念の関係
第一項　共通点と相違点
第二項　五念門による菩提の獲得
第三項　凡夫の行としての五念門
小結

第四章　浄土経典の受容と実践体系
第一節　「浄土三部経」と『往生論註』
第一項　『観無量寿経』受容に関する仮説
第二項　「浄土三部経」引用箇所とその概要
第二節　『観無量寿経』引用意図再考
第一項　背景としての禅観経典
第二項　凡夫の行としての観想
第三項　称名の位置づけ
第三節　浄土教と禅観思想
第一項　禅と浄土の接点
第二項　『観無量寿経』による思想の連結
小結

結論

Ⅲ　論文の要旨

序論

序論には、本論文のねらいが述べられた後、各章の内容が概観されている。以下、序論に述べられる本論文のねらいをまとめる。

曇鸞『往生論註』において説かれる「修行者の実践」に関する従来の研究には、いくつかの未解決の課題が残っているが、今日に至るも十分な検討がなされているとは言い難い。その理由の一つに、その実践についての具体的な背景が確認できていない点が挙げられる。『往生論註』に関する先行研究は、主に影響関係が明白な『十住毘婆沙論』『大智度論』などの龍樹著作を中心に進められてきた。龍樹、そして、彼の著述の多くを翻訳した鳩摩羅什とその弟子・僧肇などの中観思想の影響のもとに、曇鸞の思想が形成されたことは疑う余地がない。しかし、その影響は主として教義面には適用されるものの、実践面を考えた場合はその限りではない。加えて、曇鸞の著述中に、実践体系の中心となる何らかの明示的一義的な思想を見出すことも困難な状況にある。『往生論註』は多種多様な思想が取り込

まれて形成されており、曇鸞浄土教の全体像の把握には可能な限り幅広く諸思想との関連性を考慮する必要がある。このように氏は曇鸞研究の現状に関わる課題認識を開陳する。そして本論考では当時の北魏仏教界の信仰や実践の状況から、北魏に生きた仏教者である曇鸞に影響を与えたであろう思想を想定し、その影響関係を考察するという方法を採ることを述べている。氏がそこで注目したのが禅観思想である。初期の漢訳経典に説かれる禅定や三昧といった実践は、後世へと受け継がれ、禅観思想として発展を遂げる。『坐禅三昧経』『観仏三昧海経』等の禅観経典といわれる一群、とりわけ『観無量寿経』は、隋・唐代に盛んに研究され、多くの註釈書が著される。曇鸞が生きた南北朝時代は、禅観経典の訳出から禅観思想が普及するに至る間の時代に該当する。時代的にも地域的にも曇鸞に対しての影響を考えることは可能であり、実践の背景としても十分に想定しうる思想である。本論は、曇鸞の背後に禅観思想を想定し、彼の意図した実践体系の再考を試みるものであると述べている。

また氏は、近年、いわゆる「宗学的視点」からの脱却を基本とし、曇鸞を中国仏教思想史上の一人物に還元することの必要性を説く先行研究に拠りつつ、本論文の立場もこれと同様であるとし、みずからの研究の立場・方針を確認している。「曇鸞浄土教」の用語に関しても、いわゆる「浄土教」的なものへと至る過渡的性格をもったものと規定する。その視点から、曇鸞に見られる浄土教の思想とそれ以外の諸思想との混在を不可解なものとするのではなく、それらの諸思想の集合体が「曇鸞浄土教」であって、特徴的とされる他力的教義展開もその一つであるとしている。

第一章　実践体系成立の背景

本章では、禅観思想を曇鸞浄土教の実践体系成立の背景として想定する必要性について論じられる。まず、伝記資料をもとに曇鸞の生涯や著述を確認しつつ、様々な思想がその背景に想定しうることを指摘する。また、先行研究の整理として、唯識、中観、道教など主たる思想背景として指摘されてきたものについて、実践に関するものを中心に整理し、それらの適用可能範囲を示したうえで、従来、浄土経典以外に主たる思想背景として考えられてきた上記諸思想は、いずれも実践体系の根幹を成すものには成りえていないことを明らかにする。そのうえで、北魏・北斉における禅観思想について、禅観経典に示される内容と、それに基づく実践の状況を確認することで、曇鸞への影響を考える妥当性が検討されている。禅観思想とは、氏の定義に拠れば、「特定の対象を視覚的イメージをもって観じていく修行法に関する思想」のことである。なかでも氏が注目するのは、『往生論註』にたびたび引用される『観無量寿経』である。禅観経典であり浄土経典でもあるこの『観無量寿経』に焦点をあて、最新の先行研究成果に拠りつつ当時の禅観思想の普及状況が詳細に確認されていく。これまでの曇鸞研究ではほぼ触れられることのなかった様々な事例を紹介し、それらを考慮する必要性について述べている。禅観経典と呼ばれる一群は、五世紀前半に漢訳されるが、それらは単に教義を伝えるだけでなく、中央アジアや中国において、実践と関わりながら発展を遂げる。主としてとりあげた『観無量寿経』は、隋・唐代に大きな影響力をもつものであるが、南北朝時代においてその受容の萌芽が確認できるものである。本章で確認しているのは、『観無量寿経』に基づく造像記である「兗州泗河発見

邑義人造像断石」「舜禅師造像記」「臨淮王像碑」の三例と、曇鸞と同時代に生きた習禅者・僧稠（480-560）がその造営に関わった小南海中窟に残る九品往生図の事例である。これらは、経典に説かれる視覚的イメージの重視とその内容に基づく実践が実際に行われていたことの証左となる。さらに、『観無量寿経』の普及には、智舜やその師である僧稠といった習禅者たちが関与しており、その地域は曇鸞の活動範囲とも重なる。習禅者たちによる『観無量寿経』の依用は先の想定を証する一つの材料といえる。このように、『観無量寿経』受容の過程は、時代的には、五世紀末の訳出から北斉代での受容、地理的には、中央アジアの石窟から訳出の地・建康に至る。そして、さらに、『観無量寿経』に目を向けた習禅者たちの住した地域は、曇鸞の活動範囲からほど近い場所でもある。こうした一連の状況は、禅観思想を曇鸞の思想背景として想定する十分な理由となると論じている。

第二章　『往生論註』における修行者

第二章・第三章では、本論文執筆の動機となる課題、すなわち従来諸説あって解釈の一定しない二つの論点、「修行者」とは如何なる者を指すのか、彼らの修する「行」とは何かをめぐって、『往生論註』に説かれる修行者の実践内容が具体的に検討されている。まず第二章の冒頭で問題の所在として、課題発生の要因、先行研究における解決方法への疑問点を整理する。すなわち、上述の課題が発生する要因は、修行者として『観無量寿経』に基づく「上品生」「下品生」という願生者の分類が用いられ、行としては『浄土論』の「五念門」に加え『無量寿経』『観無量寿経』に説かれる「十念」が受容され、さらに五念門と十念のいずれとも関係する「称名」が説かれており、五念門・十念・称名の三者の関係をめぐる整合的把握を困難とする複雑な記述となっていることによる。そのため、先行研究でも多様な見解が提示されることとなる。しかし、従来の課題解決の方法には、「願生者の分類の意図」「五念門と十念の関係」「十念の定義」という三点において問題が残る。この疑問から『往生論註』所説の行とは何かという課題にはいまだ再考の余地があることを指摘し、以下の考察がそれぞれ関連箇所の原文を丁寧に引用しつつ進められている。

そのうちまず本章では、「修行者」の内実が考察の対象となっている。そして、関連する箇所を改めて整理し、後世の浄土教理解を除いた視点で検討していきながら、上記の課題を整合性をもって理解できる見解を提示している。すなわち、修行者の位置づけが確認できる説示である「上品生」と「下品生」の対比と、「未証浄心の菩薩」と「平等法身の菩薩」の対比の内容を整理検討し、先行研究に対する疑問の一つである「願生者の分類の意図」に焦点をあて、『往生論註』にみられる願生者の分類の主旨は、「生」の理解の相違を明かすことにあり、その行を定める意図の記述は見出せないことを明らかにする。むしろ曇鸞にとって重視されたのは、往生を前後する「願生者」と「得生者」の差にあったといえる。従来、『往生論註』の行について論じられる際に問題となるのは、往生行としての「五念門」と「十念」の関係をどのように理解するかという点であった。多くの先行研究では、「上品生」「下品生」もしくは「菩薩」「凡夫」といった二種の願生者にそれぞれ異なる行を配当することで、この問題の解決を図ろうとしてきた。しかし、願生者の機根の違いによる行の違いというものが明確に読み取れない以上、この問題の解決策としては、異なる視点からのアプローチを考える必要があると氏は指摘する。また、先行研究にいわれる「上品生」

「下品生」という二種の願生者に、それぞれ異なる往生行を配当するという見解には、再考の余地があることを指摘している。そして、曇鸞の意図は、凡夫も聖者も同じく、全ての修行者が菩提の獲得を可能とする実践体系があることを証明すべく、最低ラインに位置する「凡夫としての菩薩」の往生、そして菩提の獲得を示すことにあった、という氏独自の新たな前提を設定する。

第三章　『往生論註』における五念門と十念

本章では、先に挙げた「五念門と十念の関係」「十念の定義」という疑問に対して、『往生論註』に説示される行とは何かについて、五念門と十念の関係を検討することでその解決を試みている。まず、『往生論註』において、五念門と十念それぞれが如何なるものとして認識されているかを確認し、五念門に関しては、他の中国諸師が往生の可否に注目したのとは異なり、曇鸞では往生後の菩提の獲得までが強く意識されている点をその特徴としている点に注目する。また十念に関しては、その説示から読み取れることは、少なくとも「憶念」と理解して問題ないということだけで、そこに称名の意が含まれるという明確な記述のないことを明らかにする。そのうえで、先行研究とは異なる視点からのアプローチとして、五念門と十念に関する説示の中に「心心相続」「無他想」という類似表現が使用されていることを確認し、それらが実は「念の相続」として共通するものであると論じている。当然のことながら、ともに阿弥陀仏、もしくは浄土・名号が対象として表現されている。また反対に五念門と十念の違いは、五念門は往生行であるにとどまらず、往生後も菩提に至るまで行ずるものとして捉えられているが、十念の語は往生を語る際にのみ限定して用いられているとする。そして、第二章および第三章の検討結果を総合的に踏まえて、『往生論註』に説示される行とは何かという課題に氏は一つの独自の見解を提示する。すなわち曇鸞における実践体系とは、「凡夫としての菩薩」が「五念門による菩提の獲得」を可能とするシステムの構築を意味すると論じられている。

第四章　浄土経典の受容と実践体系

本章では、前章にて指摘した曇鸞浄土教における実践体系の成立に「浄土三部経」が果たした役割、なかでも『観無量寿経』受容の意図を再検討する。『観無量寿経』に考察の対象を絞ったことについて氏は、「曇鸞の意図した実践とは何か」を考える際に生じる問題にはほとんどの場合『観無量寿経』が関与しており、しかもその受容の意図が必ずしも明解ではない点にあるとする。そして氏は、『往生論註』所説の「五念門」で見仏に至る過程は、禅観思想のそれを意図したものであり、その思想を導入する媒介として『観無量寿経』を用いたのではないかという作業仮説を立てる。すなわち当時普及していた禅観思想の地盤の中で、阿弥陀仏を対象とした禅観経典である『観無量寿経』を引用することで、曇鸞は自身が主張する実践体系の正しさを証明しようとしたのではないかと提示している。本章はこの仮説を検証する形で、以下の論述が展開されていく。まず『往生論註』における「浄土三部経」引用箇所を抽出し、それらの引用意図を全体的に捉えたうえで、特に『観無量寿経』受容の意図について詳しく検討していく。

『無量寿経』『阿弥陀経』受容の意図については、先行研究が導いた結論から出るものではないが、『観無量寿経』については、先の仮説のもと、「観仏思想」「称名思想」という視点から考察し、いくつかの指摘を行う。観仏思想に関しては、『往生論註』と『観無量寿経』の両者に見られる禅観経典の影響を確認し、その共通点として、観仏思想が凡夫の行として示されていること、ともにその根拠を阿弥陀仏の本願力（宿願力・他力）に求めていることを確認したうえで、『観無量寿経』の主たる引用意図はこの観仏思想にあるとの見解が提示されている。称名思想に関しては、まず『観無量寿経』の背景となる禅観経典では、称名は観想の前段階に位置づけられていることを確認したうえで、『往生論註』については、曇鸞が詳細な註釈（憶念をともなう称名、淳一相続の信心を具えた称名でこそ願を満たしうる等々）を施した理由は、称名を往生行として特別に重視したのではなく、当時盛んであった道教的呪術的な単に「名を称える」だけで救われるという思想への反駁だったのではないか、という見解を提示する。かくして、『観無量寿経』と同様に、称名は観想の前段階に位置づけられるものと理解すべきであると論じられている。

結論

結論では、各章の所論をまとめたうえで、再度、従来の曇鸞研究と本論文における研究視点の相違をめぐって氏の立場を確認している。周知のように曇鸞の伝記は同時代の他の人物と比して、陶弘景や菩提流支などを除けば、師資相承や交流関係に関する情報が見あたらない。また、浄土教の祖という後世の視点も相まって、曇鸞は南北朝仏教史上において、ある意味では独立した存在として位置づけられていた。しかし、歴史書などによる彼への評価からは、浄土教者曇鸞以外の一面が垣間見られることから、本論考ではその背景をより幅広く想定し、考慮する必要性について述べたのである。そのなかの一つとして本論で想定したのが禅観思想である。禅観経典の訳出とそれらに依拠した実践の状況、曇鸞と同時代の習禅者たちの動向などをみると、禅観思想への着目は一つの背景として考えうる妥当性が認められる、と述べて、氏独自の視点の意義を確認している。そして、従来浄土教（浄土教理史）について研究する際に中心となってきた論点は、「凡夫」や「下品下生」といった低階位者が如何にして往生可能かという課題であり、彼らが往生する方法としての「十念」などである。たしかにこれらが曇鸞の思想を語るうえで無視できない要素であることはいうまでもない。しかし、浄土教の仏道といえども大乗の菩薩道である限り、その目的は菩提の獲得であり、往生はあくまでもその通過点にすぎない。曇鸞を語るうえでもその点を意識する必要があると指摘し、締めくくられている。

Ⅳ　審査委員会の評価

浄土教理史の分野、特に曇鸞浄土教をめぐる研究は、これまで枚挙にいとまのないほどの先行研究が蓄積されてきた。しかしその一方で、曇鸞浄土教の全体像は必ずしも十分に解明されたとは言えないのも事実である。その理由の一つに、諸思想の混在を背景として複雑な記述内容が展開されている、曇鸞のテキストの成立状況が挙げられる。とりわけその点が浮き彫りになっているのが、行道体系にかかわる側面である。仏道修行者が「願生

者」と「得生者」に大別され、前者はさらに「上品者」と「下品者」に分けられている。そこには『観無量寿経』の九品の分類、『無量寿経』の三輩思想等の受容が見られる。またこれに加えて「未証浄心の菩薩」と「平等法身の菩薩」が対比されて修行者像が説述されている。そしてこれら修行者にかかわる具体的な実践行として、『浄土論』の「五念門」、『無量寿経』『観無量寿経』の「十念」、さらに『浄土論』と「浄土三部経」の「称名」が説かれ、修行者と実践行の関係を整合性をもって解釈することが容易ではない複雑な記述でテキストが構成されている。従来の研究では、往々にしてそこに既成の真宗学（宗学）的な枠組みを導入した研究が見られるが、そうした方法は曇鸞研究の客観性の保持を不可能とする。本論文は、こうした従来の研究状況を批判的に整理し、曇鸞を中国仏教史上の一人物、南北朝時代に生きた一人の仏教者として位置づけて、その浄土教思想の成立背景として考えられる同時代の諸思想からの影響という視点に拠って、曇鸞浄土教を思想史的に解明しようとする点にその方法的特徴が見られる。このことは、行き詰った感のある曇鸞研究の分野において新しい研究進展を可能とする一つの基本的視座として、高く評価できるところである。

本論文では、曇鸞に見られる同時代の思想の影響として、具体的に「禅観思想」に着目している。この中国仏教史における禅観思想及び禅観経典への着目、第一章においてそれを曇鸞浄土教研究の場に導入することの有効性を論証する際に事例として紹介されている『観無量寿経』に基づく造像記、習禅者・僧稠がその造営に関わった小南海中窟に残る九品往生図、等々に関しては多くを先行研究に拠っており、真名子氏の独創ではない。しかし、曇鸞が意図した実践の背景に禅観思想の影響を想定し、特に曇鸞と禅観思想の連結点として、浄土経典・禅観経典の両面を具有する『観無量寿経』を位置付けている点は、氏の研究の特徴を示しており評価できる。

第二章で『往生論註』における修行者の説示を詳細に分析し、同書では後世の諸観経疏に見られるような九品の一々に対する言及はなく、凡聖判定も行われておらず、低い階位の者（下品生、凡夫）であっても往生可能と示すことが九品に関する『観無量寿経』引用の意図であること、また作願門釈下「願生問答」、観察体相章「氷上燃火の喩」、善巧摂化章・観察門釈下菩薩四種荘厳の説示等の検討を踏まえて、凡夫も聖者も同じく修行者はすべて菩薩であり、特に「凡夫としての菩薩」は如何にして往生を可能とし、菩提を獲得していくのか、その点に曇鸞の関心が凝縮されていたこと、等を明らかにして、『往生論註』所論の修行者に関する複雑な記述内容を整合性をもたせて明確に論証している点は、先行研究を批判的に整理しつつ、堅実な資料操作を踏まえた分析となっていて、氏の研究者としての資質が十分に認められる。そのことは第三章、第四章でも、同様のことが指摘できることは言うまでもない。

氏は、第三章で、前章で提示された「凡夫としての菩薩」の具体的な実践行をめぐって、従来理解の分かれる「五念門」と「十念」の関係について、「八番問答」「覈求其本釈」等を検討しつつ、両者の「念の相続」としての共通性に注目し、『浄土論』所説の通仏教的行法である五念門に、『無量寿経』『観無量寿経』所説の浄土経典的な行法である十念を「念の相続」という共通性をもって補填することで、曇鸞は「凡夫としての菩薩」における「五念門による菩提の獲得」の道を可能とした、と論証している。これは、十念を『浄土論』において体系化された五念門という仏道修行に含まれるものと捉えることで、『往

生論註』という一つの註釈書にそれら二つが説示されていることを整合性をもって理解する視座として、氏が提唱するものであり、評価に値する見解と言えよう。

さらに、第四章では、第二章・第三章の検討結果から導き出される、『往生論註』説示の実践体系は「凡夫としての菩薩」が「五念門による菩提の獲得」を可能とするシステムの構築にあった、とするみずからの見解をめぐって、そうした曇鸞浄土教の行道思想成立の背景を『観無量寿経』受容に関する経緯を同経を含む「浄土三部経」の関連個所をすべて検討したうえで、曇鸞が「五念門」で見仏に至る過程を「禅観」として理解したこと、禅観思想を導入する媒体として『観無量寿経』を用いたことを解明している。すなわち、曇鸞は「当時普及していた禅観思想の地盤の中で、阿弥陀仏を対象とした禅観経典である『観無量寿経』を引用することで、『浄土論』に示される五念門を、自身が生きる時代と場所に即して理解した」として、独自の見解が提示されている。この禅観思想と『観無量寿経』との関係性、その曇鸞における引用の意図をめぐる考察は、前の二つの章を補完補強するものであるが、同時に氏の本論文の結論に当たるところでもある。従来の研究には見られない曇鸞浄土教の行道思想に関する見解として評価できる。

しかしながら、曇鸞が「五念門」の見仏に至る過程を「禅観」の見仏思想と交渉させて理解したと見るためには、見仏に至る過程を阿弥陀仏及びその浄土の荘厳相との詳細な対応関係（観察門等）をとおして点検する必要があろう。この点の手続きが欠落していることは残念である。また『往生論註』における「称名」の位置づけに関して、先行研究に批判的検討を加え、曇鸞が依拠した経論や当時の状況に鑑みても、後世の浄土教理史研究で言われるように称名を曇鸞特有の思想とすることはできないとし、禅観思想に共通して説かれる禅観の前段階としての称名滅罪思想を前提として、曇鸞においても称名はそれ自体が強調されるべきではなく、あくまで「観仏から見仏へと続く一連の流れ」として理解すべきと氏は論じる。しかし、その考察は必ずしも十分に説得力をもつとは言えず、この点については今後の課題として残っている。

また、自利利他、回向門の思想に関する検討が本論文では欠けている。曇鸞が禅観思想の「禅観による見仏」思想を背景に、『観無量寿経』を「阿弥陀仏・浄土を対象とした禅観による見仏」として理解し、この『観無量寿経』理解を媒介として『往生論註』で「阿弥陀仏・浄土を対象とした五念門による見仏」を説いた、と氏はみずからの所論を図式的に整理している。しかし、「実践体系」の考察であるならば、当然自利利他、回向門もその対象に挙げなければ十分とは言えない。阿弥陀仏の本願力を媒介とする自利利他をめぐる思索、往相・還相の二回向思想は、ともに曇鸞浄土教の特徴でもある。それらの思想がどのような思想との交渉によって成立しているか、そこに禅観思想との関係性は見出されないのか、この点まで解明の手を伸ばしてほしかった。本論文が残している今後の課題の一つである。氏は結論末尾において、「大乗の菩薩道である限り、その目的は菩提の獲得であり、往生はその通過点である。曇鸞を語るうえでも、その点を意識する必要があると考える。」と指摘する。今後氏によっていま指摘した諸課題をめぐる考察が深まり、「大乗の菩薩道」としての「実践体系」の全容が解明されていくことを期待したい。

上来論じたように、不十分な点もいくつか指摘できるが、本論文の学界への貢献は少なからずあるといわねばならない。とくに曇鸞浄土教の研究視点として、禅観思想と『観無量寿経』の関係を明確に提示しえたことは、今後の曇鸞研究、浄土教理史分野の発展に寄

与するものと思考する。

以上、審査の結果、本審査委員会は、真名子晃征氏が龍谷大学学位規程第 3 条第 3 項に基づき、「博士」（文学）の学位を受けるに十分な資格を有する者と認めるものである。

2015 年 7 月 15 日

主　査：　龍　溪　章　雄
副　査：　川　添　泰　信
副　査：　能　仁　正　顕